

JASIS

NEWS

No. 71

2023/3/25

日本インテリア学会会報

■会長挨拶

研究対象としての「インテリアの概念」の拡大試論

学会長 直井英雄（東京理科大学名誉教授）

大きなタイトルであるうえに、会長挨拶としてふさわしい内容かどうか、はなはだ疑問なのですが、ここ数年、ことあるごとに考えていたインテリアの概念、というインテリアという言葉のとらえ方について、最近にいたって考えが少しまとまってきたので、ここに披露しておきたいと思います。あくまでも個人の考えにすぎませんが、学会内での議論のたたき台くらいにはなるのではないかと思います。

その考えを端的にいうと、インテリアの概念をあまり狭く考える必要はないのではないか、ということです。特に、研究対象としてのインテリアについては、むしろできるだけ広くとらえておいたほうがいいのではないかと。そのほうが研究の自由な展開や実りある成果が期待できるのではないかと思うのです。

まずは、その話の前に、「インテリア」という用語の一般的な意味を確認しておきましょう。彰国社の「建築大辞典」には、「インテリア」の用語はないのですが、「インテリアデザイン」を引いてみると、「室内、屋内、建築内部空間の設計を指す」とあります。また、建築学会編「建築学用語辞典」では、「インテリア」として「建築物や乗り物などの内部の空間、およびそこに取り付けられる家具調度品などの総称」とあります。ちなみに、ウィキペディアにもあたってみました。ほぼ同じ内容で、これらが「インテリア」という用語の一般的なとらえ方といってよいでしょう。

では、単に「内側の」という意味に過ぎないこの言葉が、上述のような意味で使われるようになったのは一体なぜか。いうまでもなく、建築物や乗り物の存在が前提

になっているからです。このことは、歴史的な流れを考えても、論理的な順序を考えても、当然のことともいえるでしょう。やはり建築物という存在が先にあって、初めて内側、外側の空間が意識され、その内側の空間をインテリア、外側の空間をエクステリアと称した、という順序なのです。ここまでは、一般的、常識的なとらえ方として、否定のしようがありません。

しかし、インテリアの研究に携わるようになって、研究対象を果たして上述のように「建築物」の「屋内空間」に限定する必要があるのかというのが、長年にわたる私の素朴な疑問でした。例えばエクステリア空間の研究だって、人の営みとそれを包んでいる空間の対応関係の研究には違いがないわけですから、それまでのインテリアの研究と何ら違いはありません。研究者としては、「インテリアの概念」をもっと広くとらえておいた方がよいのではないかと考えたのです。

そこで、私の提案ですが、「研究対象としてのインテリア」を「何らかの構築物の内側につくられた人の営みのための空間」ととらえるのはどうでしょうか。そうすれば、建築物に限ることなく、例えば自動車、鉄道車両、船舶、航空機などの乗り物であろうと、あるいはその他の箱ものでであろうと、その内側空間であれば研究対象になりえます。また、建築物などの外側空間であっても、何らかの構築物の内側につくられた人の使う空間ととらえれば、インテリアの研究対象としておかしくはありません。例えば、住宅の縁側や庭、都市の街路空間や広場なども、当然のことながら対象になります。このような考えは、「インテリアの概念」の広げすぎでしょうか。

もっとも、上述のような広いとらえ方に立って研究を展開しようとするときに、十分心しておかなければならないのは、冒頭にも述べた「インテリアとは建築物の屋内空間である」という一般常識です。それに、いわば逆らって研究対象を広げようとするわけですから、研究の内容を人に伝える時には、学会の内外を問わず、その研

究がどういう意味でインテリアの研究といえるのかを、納得してもらえるように説明、主張をしなければならぬのは当然のことです。独りよがりになってはいけません。そのうえで、晴れて広い領域に研究を展開していきたいものです。

■追悼 故高橋鷹志先生を偲んで

□高橋鷹志先生の追悼と本学会へのご貢献に対するお礼

東京理科大学名誉教授
日本インテリア学会会長
直井英雄

本学会第2代会長で、現名誉会長の高橋鷹志先生が、昨年（2022年）7月にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

先生がどんな学者で、どんな業績をあげられたかについては、ここで改めて書き並べる必要はないでしょう。日本建築学会の「建築雑誌」には、立派な追悼文が掲載されています。

それよりは、先生がわが日本インテリア学会の第2代会長として、本学会の運営と発展にどのように尽力されてきたか、私に印象深く残っているその思い出を語ることによって、先生への追悼とお礼にかえたいと思います。

まず思い出するのは、中国・韓国のインテリア関連学会との交流です。これは、初代会長の小原二郎先生の代から引き継いでいる事業でしたが、三国の学会が連携してAIDIA (Asia Interior Design Institute Association) という組織を作り、アジアのインテリア界を発展させようという壮大な事業です。高橋先生の代の2004年に日本に順番がまわってきて、三国合同大会を引き受けることになり、その実施のために学会メンバーが総出で奔走しました。先生は、この大会のプレジデントとして、見事その役目を果たしてくださいました。この事業、成功裏に終わったといつてよいと思いますが、特に本学会の金銭面での疲弊が大きく、学会の本来の活動として果たしてどうなのかという疑問も残りました。現在は、ご承知の通り、「AIDIA Journal」という論文誌への参加のみにとどめています。

先生の代のもうひとつ印象深い事業として思い出するのは、「学校教室用家具のコンペ」です。確か2010年の事業だったと思います。インテリアの学術的な知見を背景にしたデザインコンペとして、本学会にふさわしい事業として企画されたものです。作品も予想以上の数が集まり、これも期待通りの成功を取めたと思っております。このデザインコンペのような事業は、本学会では初めてで、学会の事業の可能性を広げる貴重な試みではあったのですが、現会長の私の責任もあり、第2弾以降を行う

ことができていません。

先生の思い出として、日本建築学会編「コンパクト建築設計資料集成インテリア」（丸善）の刊行も忘れることはできません。先生は、建築学会の資料集成の委員長として、本学会にこの編集・刊行と、数年後にはその改訂を本学会に任せてくださったのです。改訂版のまえがきにも私が記したように、この本は、実質的には本学会の出版物だと考えております。また、この出版を縁として、丸善から本学会に「インテリアの百科事典」のとりまとめの依頼があり、文字通り本学会の出版物として世に出すことができたのは、ご承知のとおりです。

思い出は尽きませんが、先生は、本学会の発展、特に可能性の開拓のために、長年にわたって様々な面でご尽力くださいました。本当にありがとうございました。これからも、みんなで本学会を守り、育てていきますので、どうか安らかにお眠りください。

□高橋鷹志先生を偲ぶ

武蔵野美術大学名誉教授
日本インテリア学会元副会長
島崎 信

日本インテリア学会の二代目会長であられた高橋鷹志先生が2022年の7月26日に亡くなられた。85歳（1936/12/3生）であられたという。人生100年という今の時代では、まだまだと惜しいことと言わずばならないだろう。

学会としては、先に副会長であられた西出和彦先生を失って時を継いでの逝去は学会として不幸であり、残念なことでした。

「ワンポイント・リリーフで大きなことはやりませんよ」と私に漏らして居られたが、2003年から2011年に及ぶ8年間の会長としてのご努力は有難たいことと思っています。

小原二郎初代会長の引退を期に、副会長の役を引退した私は、学会運営上公的な業務での接触はほとんど無く、個性の強い初代会長のあととあってむずかしいお立場拝見することが多かったことを今でも思い出します。

東大ご在任時代に「学生に椅子を教えてください。」というお申し出をいただいて、何年間の学生指導の間での先生との交流は温かいお人柄とアルコールの多い、楽しいものでした。

ジョサイア・コンドルの立像の前、大きな銀杏の木の下に学生作品のスツールを並べての講評は「椅子って面白いものですね」とひと言。その後研究生に「ガク研」という研究プロジェクト作られての積み重ねは助手、院生を含めて幅広くそして愉しいものでした。

お好きな杯を重ねられる席で、漏れ何うお話は面白く、私の父親が神田神保町で洋書の古本屋を営んでいたということを耳にされた後、お祖母様が神保町の角で和菓子を扱われていたとお聞きした時は誰の酒席が一気に

なごやかになったものでした。高橋義孝先生のこと、高橋公子のことなど杯が無ければお聞きできないお話の中に高橋先生のお人柄を知ることが出来た気持ちでした。

東大名誉教授として日本インテリア学会会長として長年のご努力に深謝いたしますと同時に心から高橋鷹志先生のご冥福をお祈り申し上げます。

□名誉会長 高橋鷹志先生のご逝去を悼む

元千葉工業大学教授
日本インテリア学会副会長
上野義雪

本会名誉会長、東京大学名誉教授の高橋鷹志先生が、2022年7月26日に85歳（1936/12/3生）でご逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

高橋鷹志先生は、日本インテリア学会初代会長の小原二郎先生から二代目会長として会長のバトンを2003年に引き継がれ、2011に及ぶ8年間、会長として学会改革に努めてられました。

改革の一つに、会長を含む総務委員会会議をスタートされたことがあります。これは、従来の会長補佐会議に代わるもので、学会の風通しをよくすることを意図され、現在も定期的に総務委員会会議が行われています。また、会員の退会者の増大、学会運営などについて懸念をもたれ、その改善に苦慮されておられました。

学会事務局が2005年に千葉工業大学から東京大学に移転し、西出和彦先生に事務局をお願いしたのは丁度この頃になります。

高橋先生は、パソコンをお使いにならないため、会議などでは手書きの資料を提出され、その都度、新鮮さを感じたことをよく覚えています。先生の書かれた文字は、建築系の先生方の文字と共通点があり、また高橋先生の愛弟子である西出先生の文字と高橋先生の文字がよく似ていること興味を持って見ていたことがありました。

総務としての私と高橋先生のやり取りは、はがきか手紙によるものであり、はがきには緑のインクを使用されておられたことが印象的であり、お手紙には、「いつも至らなくて申し訳ない」とのお言葉が添えられていました。

高橋先生は学会大会の実行委員長として関わられたのは、1993年の第5回大会が日本大学工学部開催された時が最初で、その後1996年開催の第8回大会が東京大学にて開催、そして2001年の第13回新潟大会へと及ぶ。お一人の先生が大会実行委員長を3回にわたって歴任されたのは、高橋鷹志先生が初めてであり、このようなケースはほぼないと思います。

これまで高橋先生は、住宅のインテリアは縁側や庭など外部空間をも含むと常に説いておられ、12回大会では、このお考えをもとに「内と外をつなぐ」をテーマに長谷川逸子氏の設計された新潟市民文化会館において大会が開催されました。

高橋先生は、こよなくお酒を愛され、関西方面での大会懇親会では先生の隣が私であった時に、日本酒をお注ぎしていたことを覚えており、おいしそうに召し上がっておられた先生のお姿は今でも忘れることはできません。

2022年6月25日に開催された西出和彦先生を偲ぶ会の会場で車いすに乗られた高橋先生のお姿を遠くからお見受けしました。この時は先生のお近くに伺うことができず、先生をお見掛けする最後になったことが残念でなりません。

日本インテリア学会発展のためにご尽力をいただいた高橋鷹志先生の冥福を心からお祈り申し上げます。

□高橋鷹志先生を偲んで

女子美術大学教授
横山勝樹

昨年7月26日に高橋鷹志先生がご逝去された。令夫人で千葉工業大学教授の橋本都子先生のご高配により数名の教え子も会葬者に加えて頂いた。私も最後のお別れをさせて頂いたが、改めてここでご冥福をお祈りしたい。

高橋先生は学部では鈴木成文先生のゼミで団地に住む小学生の交友関係を調べ、そのソシオメトリーを研究された。大学院は池辺陽先生の研究室に進みモジュールの研究をされたが、その際に人間の心理を加えて考えることが必要だという思いが高まったと聞いている。日本女子大学教授を務められた高橋公子先生との出会いはその頃で、バイクを乗りまわすカッコ良い青年だったと公子先生から伺ったことがある。

高橋先生はその後に、吉武泰水先生の研究室に移籍され、東京大学医学部附属病院の建設計画に参画された。また八郎潟の農村計画の研究会では、ケビン・リンチのイメージマップ研究に触発されて、都市とは真逆の広大な平原での人間の心理に興味を持たれたと聞く。その当時、建築家の富永譲先生と東北工業大学教授を務められた二瓶博厚先生が学部生にいて、高橋先生はその卒論を指導された。そこから一連の識別尺度の研究が始まったのだが、実験は最大8 km先から人の姿を探し出し、知人と分かる距離、表情の分かる距離、話しかける距離などを測るという極めてシンプルなものだ。しかしそこからヒューマンスケールとは何か？という空間デザインの重要な命題が解き明かされていく。この研究はさらに西出和彦先生とのパーソナルスペース研究へと展開される。

先生の研究室に私が入った時は、パーソナルスペース研究の全盛期だった。しかし私は先生から研究において何事か指示や強要をされたことは一度もなく、自分が思う事を勝手気ままにやらせていただいた。先生は先述の東大病院の設計では学園紛争のあおりで本意な思いをされたそうで、学外プロジェクトを院生に勧めることも積極的にはされなかった。ただなぜか私は先生が委員を務める世田谷区の教育センター建設や学校開放施設のプ

プロジェクトに誘ってもらった。暇そうに見えたのだろう。後日私は文部省の空き教室検討委員会（委員長は吉武先生）や文教施設協会の学校用家具委員会（委員長は小原二郎先生）の末席に加えてもらったが、それは高橋先生から頂いた経歴のおかげだ。ちなみに学校用家具委員会の委員長は、小原先生から高橋先生に引き継がれた。

研究室在籍時で記憶に残るのは、「建築は三枚におろす」という教えだ。もとはライトに師事した遠藤新の言葉だが、魚の背骨が身ごろの空間であり両脇には袖になる空間を配するということだ。それぞれの空間の天井高を変えたり、部屋への入口の位置を変えたりすることで空間の印象が変わる。また一方で「建築は空気のようなものが良い」とも言われていた。人間の心理を探求して建築をそれに調和させれば、空間は自ずと空気のようになる。

生前の高橋先生は多くを語らない方だった。しかしその教えはインテリアの研究とデザインに関わる人々に広く受け継がれていくだろう。

□高橋鷹志先生を偲ぶ

旭化成ホームズ株式会社
くらしノベーション研究所顧問
松本吉彦

高橋鷹志先生の訃報は2022年8月上旬のメールで知りました。6月の西出和彦先生を偲ぶ会では車椅子を使われていたので少し心配しておりましたが、しっかりと会話はされていましたのでそれから1か月、7月26日に亡くなるとはあまりにも早く、驚いたことを鮮明に覚えています。後に亡くなる当日の夕食でも白ワインを召し上がったと聞き、最期まで先生らしいなと感じました。

私の卒論は高橋鷹志先生にご指導いただきました。このとき助手だったのが西出先生です。人間が建築空間をどのように感じているのか知りたい、という学生時代に抱いた思いをそれから40年持ち続けることができたのは鷹志先生のおかげかと思います。まさに卒論が佳境の1983年1月に先生の自邸「管の家」が完成し、引越しの手伝いに行ったことが昨日のこのように思い出されず。

大学卒業後も先生とお会いする機会が続いたのは、「管の会」という、この自邸に集まるパーティが数十年間に渡って定期的にあつたからだだと思います。先生は大相撲の千秋楽を観戦される習慣があり、その前夜が管の会、と決まっていました。学生、卒業生はもとより、親交のある先生方や建築関係以外の方も含め、実に様々な方々が毎回30-40人集まっていたと思います。珍しいお酒が豊富にあり、一人一品持ち寄った食事で立食、やがて適当な所に座り込む、といった形で「人間の集合」が住宅全体の空間で展開され、高橋研OBOG内に留まらない広範囲の人的ネットワークが造られて行きました。先生から「松本君、何で〇〇先生とつながりがあるの？」と

か聞かれたこともあります。それは管の会で何度もお話していたからで、先生が知らないところでたくさんの人のつながりが生まれていたはず。3-3-3-1の手締めを指1本から始め、2本3本と1本ずつ増やして最後は手のひら全体の普通の締めになる、というユニークな伝統もこの会の思い出です。

私の日本インテリア学会とのつながりも鷹志先生からのお声がけからです。2005年の年賀状に「インテリア学会の件よろしく」のようなことが書いてあり、これって何でしょうと西出先生に問い合わせ「会長指名の理事になってほしいという話だ」というのが発覚、当時会員ですらなかった私は急遽入会届を書き、その年の理事会に出席しました。当時先生は「もの忘れ」エピソードを多く語り、もの忘れ学会を作るなどと冗談を言っておられたころなので、おそらく私に言うのを忘れていたのだと思います。当時私はまだ会社では研究職が本務ではなかったのですが、その2年後に研究所所属となり、その後ずっと研究活動を企業内で続け、インテリア学会でも活動し続けられたのは先生の先見の明でありお導きなのではないでしょうか。

私があのでの会に参加できるのはしばらく先のことになると思いますので、それまでは先生に作っていただいたインテリア学会などの現世の「人間の集合」のなかで今しばらく過ごしていきたいと思います。鷹志先生、今まで本当にありがとうございました。

■第34回日本インテリア学会大会（福島）開催報告

実行委員長 市岡綾子（日本大学工学部）

第34回日本インテリア学会大会は、2022年10月22日（土）、23日（日）の両日、総務委員会と前年開催された関西支部の多大なるご支援により、日本大学工学部を会場に、福島県にゆかりのある方々有志による実行委員会を組織して開催されました。昨年度と同様にコロナ禍を鑑み、完全オンライン開催で実施することとしましたが、関西支部の中村孝之支部長をはじめとする昨年度の実行委員の皆様から情報の提供を受け、早い段階でオンライン開催の具体的なイメージが把握できたことは非常にありがたく、この場を借りて改めて御礼申し上げます。さらに総務委員会の松崎元先生、白石光昭先生には当日運営に至るまで、献身的なサポートを賜り、厚く御礼申し上げます。発表プログラム編成を担っていただきました江川香奈先生にも、心から謝意を表します。

日本建築学会賞を受賞された速水清孝先生（日本大学工学部教授）を大会長にお迎えし、上野義雪副会長のご支援により、福島らしさをお伝えできるように意識し、準備を進めました。その概要をここに報告いたします。

昨年度と同様に、完全オンラインの開催を春には確定し、総務委員長の松崎元先生にご担当いただき大会ホームページを開設、卒業作品展も学会本部ホームページにて掲載、誠に残念ながら懇親会は中止しました。昨年度と同様、遠方からの参加を考慮する必要が無くなったため、第一日目に開会式と研究会、第二日目にオンライン講演会・見学会・表彰式・閉会式を行うこととし、今年度も時間的にゆとりあるプログラム編成ができました。大会当日は、日本大学工学部キャンパスに大会本部を設け、大学からIT技術者による支援を受け、つつがなく実施することができました。

10月22日（土）開会式・研究発表会（すべてZoom配信）

（1）開会式

牧田和久実行副委員長（会津大学名誉教授）が開会宣言と司会進行をおこない、現地にお越しいただきました直井英雄学会長、続いて速水清孝大会長による開会のご挨拶をいただきました。



大会長速水清孝先生による挨拶



学会長直井英雄先生による挨拶

（2）研究・作品発表会

3教室で研究発表、作品発表を行いました。教室ごとに実行委員等1名がZoom管理、実行委員を務めた日本大学工学部学生1名がタイムキーパーとして常時滞在し、各セッションが実施されました。参加者皆様のご協力により、無事に終了いたしました。深謝申し上げます。

10月23日（日）記念講演会・見学会・表彰式・閉会式（すべてZoom配信）

（1）記念講演会

牧田和久副実行委員長の司会により、大会長である速水清孝先生に「資格をめぐる葛藤—日本の建築家と建築士—」と題してご講演いただきました。

建築基準法と両輪の関係を持つものとして定められた建築士法は、1950（昭和25）年の制定以来、建築家をはじめ、建築に携わる人たちから芳しい評価を得ず、批判まみれのまま、制定の意図すら知られることなく現在に至っていた点を示されました。制定の背後にまで踏み込まれた内容を丁寧に資料に基づき説明されたことで見えた、想像とは全く異なる建築士法の姿をご教示いただき、複数の建築家による見解を紹介されるなど、非常に興味深い内容でした。

（2）見学会

牧田和久副実行委員長の司会により、実行委員長である市岡綾子（日本大学工学部建築学科専任講師）が、「福島の建築紹介—福島出身建築家 大高正人の作品を中心に—」と題してオンライン見学会を行いました。残念ながら中継映像などによるリアリティのある見学会開催は断念し、福島県立美術館や三春町からのご協力により、事前の写真や動画による紹介を行うこととしました。福島県立美術館では、当学会大会の趣旨にご理解を示され、特別に企画展の朝倉展と常設展示での撮影許可を賜わり厚く御礼申し上げます。また、大高正人展用に撮影された三春町内の大高正人設計作品を紹介する映像使用を許可いただいた文化庁にも御礼申し上げます。三春町では、大高先生と一緒に仕事をされた方々から当時の貴重なお話を伺い、皆様に披露しました。関係各位の皆様にご場を借りて厚く御礼申し上げます。

最後に、福島県内の建物を平安時代から時系列で写真紹介いたしました（日本大学工学部建築学科歴史意匠研究室提供）。状況が落ち着きましたら、ぜひ福島にお越しいただきたくお待ちしております。

（3）表彰および閉会式

牧田和久副実行委員長による司会で、中継会場からは直井英雄学会長とともに両日会場にお越しいただいた松崎元総務委員長、オンライン画面からは、高月純子表彰委員長により挙行されました。

〈名誉会員表彰〉

片山 勢津子（副会長・前関西支部長）、

白石 光昭（前総務委員長・人間工学研究部会長）

（順不同・敬称略）

〈学生発表奨励賞〉

「市民に開かれたスペースの設えに関する研究—福島県内の庁舎におけるケーススタディー—」

吉澤 伊代（日本大学大学院）

「インクルーシブ保育を展開する子ども施設の建築計画的な研究」

廣川 真理子（東京電機大学大学院）

「内田仙司が手掛けた建築作品に関する基礎的研究—現存遺構の把握と分析—」

渡邊 凜（岐阜工業高等専門学校 専攻科）

「単独交差実験における歩行者の回避挙動からみた回避予兆・回避領域に関する研究」

木原 己人（東京都市大学大学院）

『高校生に向けたインテリアの色彩デザイン教材の提案』

・高等学校優秀作品賞

美素 康太（岐阜県立高山工業高等学校）

『Super light』

高橋慎己、紀大貴、山本知世、清水真桜、森乃々佳、門口茉未（千葉県立市川工業高等学校）

『市工 RENOVATION』

〈卒業作品展表彰〉

・最優秀作品賞

南 海宇（東京藝術大学）

『文 —MON—』

・優秀作品賞

加納 俊一郎（京都芸術大学）

『The Potential Of The End 終焉に秘められた可能性の追求』

柴垣 佑圭（共立女子大学）

『Renovation Farmers College 廃校利用による逗子市農業活性化計画—』

伊藤 冠介（札幌市立大学）

『wh/eat』（ウィート）

山元 明日香（名古屋工業大学）

『Wine Village ～人と葡萄の醸成～』

吉田 奈未（日本大学）

『布降る街、商いを導く知との邂逅—ファッション的な空間構成—』

中里 詩織（フェリカ家づくり専門学校）

『静寂を楽しむひとときを—ホテルのインテリアコーディネート—』

・特別作品賞

野中 小夏（愛知淑徳大学）

『関係人口に、わたしがなる！マイパブリックの精神で自分らしくマチとつながる』

吉川 陽菜（文化学園大学）

「日本インテリア学会第34回大会開催の背景と今後の課題」

第34回大会実行委員 上野義雪

これまでの大会開催は、支部の順番制により実施してきた。数年前に東北支部がその順番を迎えたが支部の事情により東北支部大会の開催は難しいとの意向が示された。過去における東北支部大会は、第5回大会が日本大学工学部において、15回大会は東北芸術工科大学、そして24回大会は東北文化学園大学を会場に開催された。

この中で第34回大会開催の可能性を他の支部に打診をしたところ、残念ながら開催の可能性について回答を得ることができなかった。学会大会は、学会の最も重要な活動であるため、大会の開催中止はあってはならないとの信念のもと、誰かが旗振りをしないうり大会開催はあり得ないと判断し、ない知恵を絞って私の知人の協力を得ることを考えた。

私の母校は東北に位置する郡山市の日大工学部であることから、この地を会場として開催に必要な人員を探し出せるか考えた。その結果、福島県内に在住する日本大学工学部建築学科、千葉大学工学部建築学科、千葉工業大学工業デザイン学科に縁のある仲間に協力依頼したところ快諾をいただくことができ、大会開催に向けて日本大学工学部建築学科の市岡綾子先生と詳細の打ち合わせを開始することになった。そして、日大大会の開催について総務委員会に諮ったところ承諾を得ることができ、



大会会場での集合写真

「福島大会」として本格的な準備作業に入った。

大会実行委員長を引き受けて下さった市岡綾子先生は、私が千葉大学の助手の頃の学生さんであり、また、大会長の速水清孝先生も千葉大学のご出身であることから大会開催について確信をもつことができた。大会実行副委員長には、私と共に千葉大学に赴任した牧田和久会津大学短期大学部名誉教授に引き受けていただくことができた。

実行委員会のメンバーは、市岡研究室と速水研究室の大学院生、私の学生時代の教員でおられた藤田延幸先生、日大卒で千葉大学小原研究室の研究生、千葉工業大学の卒業生の方々と構成することができた。33回大会は関西支部によりリモートで開催されたことから関西支部の後方支援、総務委員会による研究発表プログラムの編成など、更に日本大学事務局のご協力などをいただくことで大会開催が可能となった。

大会当日には、直井英雄会長、松崎元総務委員長、白石光昭総務委員には手弁当で会場に向かいいただき、開会式、発表会、理事会、記念講演、閉会式などを挙行することができた。ここに関係された皆様方に心から感謝と御礼を申し上げる。

本大会の開催計画については、次年度以降の大会開催を考慮し、新型コロナウイルスの感染拡大によりリモート開催になった場合を想定し、開催支部の負担を軽減することを前提に計画した。リモート大会を開催して感じたことは、遠方からの会員による発表や大会参加を可能とするメリットのあることなどである。

思いおこせば、2018年6月12日、東京駅地下のニュートウキョウで市岡綾子先生とお会いして、学会大会開催に向けて協力を得るためのお時間をいただいた。これが大会開催に向けての踏み出しとなった。市岡先生とメールや電話による意見交換では限界があったため、東京から郡山に向かわれる先生に直談判をしたことが昨年10月22日、23日の第34回大会の開催に繋げることができた。

日本大学での大会開催を決意し、多くの方々からのご協力をいただき大会の開催にたどり着きました。その中で私を案じて大会開催を踏みとどまるように進言して下さった方もおられ、人の情けを感じました。

企業・団体の広告協力依頼は、市岡先生か私がおつき合いのある公益社団法人インテリア産業協会、日建学院、株式会社正文社に絞ってお願いをし、協力を得ることができました。

今回の大会開催で人と人との繋がりの大切さをこの歳にして改めて感じることができました。多くの人に感謝です。

■日本インテリア学会 第34回大会（福島） 研究発表講評

【情報技術と設計】 001～003

座長：江川香奈（東京電機大学）

001 「3次元レーザースキャナーを用いた茶室清恵庵の実測調査」は、3次元レーザースキャナーにより得られた点群データにより、2次元の建築図面化する際の誤差を検証している。詳細な分析により、今回は大きな誤差は見られなかったことが示された。色彩や材質、形状の異なる空間でも分析を進めることで、使用できる対象範囲が広がると予測される。

002 「VR空間の活用実態に関する考察」は、小売分野におけるデジタル化とVR空間の活用実態について明らかにしている。実空間とは異なる空間的なデザインという新しい分野への基礎的な研究であり、今後はこれまでの実空間でのインテリアデザインとのデザイン手法の違いなどが明らかになることが期待される。

003 「木造住宅設計におけるパラメトリックモデル化の試み」は、設計思想に基づいたルールをもとに設計された住宅のパラメトリックモデルを作成し、実施設計者に制作したモデルを操作してもらい、ヒアリング調査から使用上の利点や課題をまとめている。調査対象者が1名であったため、今回の調査結果を反映させた改良後に、調査対象数を増やし再検証することで、より設計時に活用しやすい内容が構築できると考えられる。

【地域・公共施設】 004～006

座長：近藤正一（日本文理大学）

004 2011年以降に新築された福岡県内市町村の庁舎における“市民に開かれたスペース”について図面情報の得られた8事例を対象として平面構成モデルを作成し、それぞれの利用状況を詳細に分析することにより、動線や視線の処理が十分でない執務空間の空気感と同化し利用者が定着しづらくなる傾向があることを明らかにするとともに、設えによる視線・動線の緩和が重要であることを指摘している。設えの工夫や配置方法によりさらに快適な空間となる可能性があり、今後の発展が期待される。

005 かつて奥州街道の宿場町として栄えた福島県矢吹町において「町全体を図書館に」というコンセプトのもと屋外空間に本棚を設置するプロジェクト活動の実施を通じて、まちなかに交流を生む仕掛けに関する検証を行っている。本棚の耐久性向上や環境に相応しい色彩を工夫し、また利用しやすいデザインを考案することで利用率向上を図り、設置数を増やし、調査に基づきレイアウトを調整するなど、積極的な関与を継続することで、常時型・イベント型まちづくり活動の在り方に一石を投じている。

006 東京都23区に所在する1,411の認可保育園を対象としてアンケート調査を実施し、回答の得られた192園についてインクルーシブ保育を展開している園としない園との比較を行った結果、展開園では障がい児等の受け入れや障がい児が気持ちよく過ごすための工夫がなされていることを明らかにしている。質疑応答の中で、さらなる詳細な分析による研究の発展が示唆され、発表者より保育園を「みんなの空間」として捉える新しい在り方について言及された。今後の展開が期待される。

【教育】 007～011

座長：清水隆宏（岐阜工業高等専門学校）

007 インテリア及び建築に関連する資格試験は多く存在するが、その製図試験での表現方法の差異について明らかとする研究である。キッチンスペシャリスト、インテリアコーディネーター、インテリア設計士、一級建築士など8種の資格での製図における平面図の試験内容を分析し、設計対象は住宅、縮尺は1/50とする例が多く、記載を要する内容は様々であることを指摘している。つまり、本会インテリア製図通則の重要性とその完成度向上の必要性が明らかとなり、その取りまとめを行う筆者らの今後の活動の発展が期待される。

008 インテリア分野の研究等を通じて社会貢献を果たすことは本会の存在意義であり、そのためには論文投稿数や口頭発表数を増加させる必要がある。本研究は、研究の実施や論文の作成に不慣れな人に対し、具体的にその手法を講義した重要な活動、「インテリア系の論文の書き方セミナー」の報告である。大学や企業の研究者以外では一般に論文を書いた経験がなく、インテリアに関わる職業に携わる人であっても論文作成に積極的ではないことが明らかとされた。セミナー参加者のその後の研究活動状況の把握、セミナーの継続的な実施についても期待したい。

009 本研究は日本独自の学校文化である児童・生徒による学校掃除を対象とした、大変興味深い研究である。学校掃除は毎日行われ、指導要領にも記載があるものの、掃除方法は昔から変わっておらず、現代の家庭での清掃方法が時代と共に変化している実態と大きく乖離している点を指摘し、教育現場での実態を把握するため、長野県・岡山県・島根県の小学校教員に対して意識調査を実施している。掃除に対する児童の内発的動機付け、その長期的維持の方策、時代に合わせた新たな掃除方法の検討、この様なことが今後の課題であるとしている。

010 柔軟なイメージやアイデア創出のための有効な手段として、近年イギリスのインテリアデザイン教育において重要視されているムードボード（インテリアのストーリーボード）に着目した研究である。実際の教育の場で、従来のカリキュラムに加えてムードボード作成を取り入れて実践した手順が詳細に紹介され、その成果についても明らかとされた。ムードボードの活用が大きな成果を生んでいるというイギリスでの事例と、最新の状

況について興味を持つ内容であり、それらを示す次報が期待される。

011 低価格化が進み利用者が増えている3Dプリンタの教育機関（住居系学科）への導入事例における知見を共有するための報告である。新しい機器を導入する際、日々変化する性能や適正な導入及びランニングコストの判断、勝手が分からない操作や維持管理等、様々な困難が生じる。本研究では、3Dプリンタの使用に関連する多種多様な情報を、詳細かつ丁寧に分析しており、これから導入検討や使用する人に対して実用的な情報を提供している。実際にはもっと多くの問題が発生し、その解決策や回避方法の知見が積み重ねられていると考えられ、より詳細な知見を記す次報も期待される。

【歴史1】 012～015

座長：徳田良英（帝京平成大学）

012～015 歴史1では4演題の発表がありました。片山勢津子氏よりヴォーリズ建築初期の吉田悦蔵邸にある家具修復についての詳しくお話を頂きました。新井竜治氏より籐家具デザインについて、特に本邦の幕末から明治の歴史的背景からの考察して頂きました。八代美智子氏よりテキスタイルデザインを作者のヨーゼフ・フランクの生涯と対比してわかりやすく説明して頂きました。渡邊凜氏は名工、内田仙司のいくつかの作品を取り上げ、歴史的な考察をして頂きました。有意義で活発な議論がされました。

【歴史2・美学・意匠登録】 016～019

座長：藤井容子（日本学術振興会/富山大学）

016 「コロマン・モーザーとヨーゼフ・ホフマンの空間デザイン」は、丁寧な文献調査に基づいて、19～20世紀転換期のウィーンにおける両者の活動を時系列に比較し、他分野の作品と空間デザインとの関連性を明らかにしている。空間デザインとそれ以外での共通の活動領域と単独での活動領域に分け、数多くの表と図を駆使して考察を試み、両者の共通項として規則性・抽象性・幾何学性を挙げ、直線的・幾何学的デザインの先駆者と位置付けている。今後の更なる発展に期待したい。

017 「尼崎市立浦風小学校用地取得の経緯」は、同小学校の円形校舎採用の理由を探るため、用地取得の経緯を明らかにしようと、市議会会議録等とともに航空写真と登記簿の比較によって用地の変遷を確認している。前報では、円形校舎の使われ方に着目してその変遷が明らかにされ、本報はその続編であり、児童の急増対策として建設が急がれたが、竣工の遅れは用地取得の困難さを明示している。他校による円形校舎の採用も敷地の制約によるものなのかどうかについても興味深い課題としたい。

018 「インテリア美学 (04・終章)」は、建築美学に内包されるインテリア美学・創作美学・享受美学のうち、創作美学の美の要素である目的美と構成美の一部の続報であり、様式美・形成美・総合美についても論じ、ま

た、設計・デザイン・創作する側の創作美の留意点、インテリア美を構成する美の要素について解説している。様式美については現代・未来系にも考察が及んでいるが、持続的・社会的構築に向けたインテリアの創造でのSDGS系の様式についての具体的な言及が望まれる。

019 「意匠制度改正に基づく建築・インテリアデザインの意匠登録状況に関する調査 その2」は、前報に続いて、特許法の改正により、意匠制度の保護範囲が建築・インテリアの空間にまで拡大されたことから、建築物と内装の意匠登録結果によって出願者の動向と制度の有効な活用方法を見出そうと試みている。ユニット・規格化した展開や統一的な企業イメージによるブランド戦略に寄与する建築・内装は、本制度との相性が一定程度良いと示唆している。これらの関係の更なる調査が期待される。

【人間工学・環境工学】 020～024

座長：中村孝之（生活空間研究室）

本セッションでは、今後のインテリアデザインのエビデンスとなりうるテーマ5題が発表された。

020 「スタンディングデスク使用における主観的疲労感」は、日本人の座位時間が長いことに加え、近年の在宅ワークの増加で健康への悪影響がさらに増加していることに対し、立位での作業による改善効果をテーマに、座位と立位のほどよい調和を目指す研究である。本研究では、スタンディング姿勢で疲労負荷をかけ、評価指標を用いて主観的疲労感を評価した。そのけた立位による下肢、背部及び、作業による右肘、手首の疲労感はあるが、同時にねむけ感の減少も認められたことで集中作業への適性も見られるため、今後、立位での作業を推進するため、筋電図などを用いた生理評価にも大いに期待する。

021 「インテリア空間のユニバーサルデザインの推移の考察6」は、長年継続して住宅展示場の調査に取り組んでおられる成果である。ハウスメーカー各社の、最新の商品開発への取り組み状況をまとめており、住宅市場の動向がわかる。また今後、質問にもあったように、各社の建物について、狭義の（可能な限り多くの人が利用しやすいよう工夫された）ユニバーサルデザインについての分析が望まれる。

022 「単独交差実験における歩行者の回避挙動から見た回避予兆・回避領域に関する研究」は、人々の動線が交錯する大規模な施設において、衝突を回避する挙動と密度の関係を、対面通行の角度を設定して実験したものであり、歩行時の動作をモーションキャプチャーを用いて詳細に計測、分析している。本研究では回避予兆行動を観察、評価している点が興味深く、群衆密度と歩行負荷の分析が、今後の大規模施設における動線デザインに活かせることを期待する。

023 「緊張緩和等の生体・関西反応評価に基づく居住空間のインテリアスタイルと噴霧型フレグランスの整合性」は、2つの異なるフレグランスを特定のインテリア

スタイル空間に適用し、それぞれの体感を、皮膚電位(EDA)と心電(ECG)による生体計測によって評価したものである。EDAからは発汗量による緊張度の違いが分析され、ECGによるR-R間隔、心拍から緊張と緩和の変化がリアルタイムで測定された。本研究では2種類の比較であるが、これをベースに空間デザインとフレグランスの関係、フレグランスのデザインに対するエビデンス構築を期待する。

024 「サウンドスケープ・サウンドインスタレーションによる空間・音体験に関する実験的研究」は、視覚に頼りがちな環境知覚に聴覚を加えることで人と環境の新たな接点を生む可能性のあるサウンドスケープと、芸術的空間を創出する体験型アート作品であるサウンドインスタレーションを合計8種類制作し、評価実験を行った研究である。大学生の自室、大学の教室、駅のプラットフォーム、車道沿いの歩道を対象空間として、各サウンドの印象を評価しており、動的印象、静的印象の付与について一定の影響をもたらすことが確認された。今後、様々な環境において、視覚的デザインのみならず、人の行動をアフォードするサウンド、人により良い印象を与えるサウンド等のさらなる展開が期待できそうだ。

【住宅1】 025～028

座長：松田奈緒子（大阪産業大学）

025 住宅のトイレ空間の用途が多様化している兆しを読み取り、トイレ特有のニオイへの対策の必要性に着眼し、人々のトイレのニオイに対する意識やニオイ対策の実施についてweb調査により明らかにした研究である。トイレ空間の満足度向上にはニオイ対策の実施が特に有効であることを導き出した。会場からはニオイの発生源、使用者の年齢や滞在時間との関係等、多くの質問が挙がり関心と反応の大きさが窺えた。

026 025の続編で、コロナ禍で自宅のトイレ使用の頻度が増したことによるトイレへの関心の高まりを捉え、トイレ内の収納の実態に焦点を当てた調査研究である。詳細なWeb調査を通して、トイレ収納の有無による収納物やトイレの満足度への影響が確認された。その上で、トイレ空間の満足度を高めていくために、本調査結果を基にした具体的な収納提案が示された。さらなる研究の発展と商品の実現化が期待される。

027 超高齢化社会において、高齢期を豊かに自分らしく過ごすことのできる住まいを提案するために、熟年・シニア世代の関心事を明らかにしようとする研究である。対象とする世代は、親も長寿となることに着目し、自身のためだけでなく親のためにどのような情報を収集しているのかについてもWeb調査を通じて明らかにした。会場からは同世代として切実に感じられるといった意見が多く挙がり、今後の提案へ大きな期待が寄せられた。

028 都市部を中心に1980年代以降普及してきた賃貸併用住宅とそのオーナー家族の住まい方に焦点を当てた研究である。Web調査と図面調査の子細な分析に基づき、

経年によるオーナーの家族数の変化と自宅用・賃貸用として設計された住居間の移行や併用等の関係について、いくつかのパターンがあることや、変化に対応しやすい設計の事例が示された。会場からは、配置（階数や位置）の変化や周辺環境との関係についても質問が挙がるなど、関心の高さが窺えた。今後の展開が期待される。

【住宅2：インテリアエレメント】 029～032

座長：松本吉彦（旭化成ホームズ）

029 住宅の寝室における夏季の環境調整についての実態調査である。睡眠時エアコンを使わない人は睡眠の質についての満足度が下がっていること、使わない理由は電気代の心配が冷えや乾燥などの理由より上位であることを明らかにした点が興味深い。8月の平均気温が26度以下であれば窓開けで快適性が確保できる可能性が示されているが、その条件で窓開けで快適に眠れているというエビデンスを加えて、就寝時の推奨される環境調整法を地域別に示していくことが期待される。

030 家具産業における環境対策の現状と課題を整理した論考である。製造、輸送、販売に至る過程以外で、使用後のリユースや、粗大ごみとしての回収後に焼却ではないリサイクルの利用を増やすという課題が指摘され、それらの取り組み事例が紹介されている。家具に特化したサーキュラーエコノミーの全体像を明確に示したことに価値があり、使用材の植林などの活動や修理も含め、業界が取り組まなければならない課題が示され、今後具体的成果へとつながる研究に発展することが望まれる。

031 コント番組の場面設定からインテリア要素を抽出してインテリア空間の表現法を探る研究である。特徴的な用途の机と椅子を使用し、住人に特徴的な小物を組み合わせることで、衣装だけでは表現しづらい住人や空間の設定を最小限の要素で表現していることが明らかにされた。用途を想定して造られた家具がその用途の表現に用いられる、という関係が興味深いとともに、芸人の発想と努力を研究に活かして成果に結びつけようというユニークな発想にも感心させられた研究であった。

032 家具と所作オントロジーからLDKの広さの適正値を探ろうとする研究である。所作オントロジーは従来の動作空間を基にした検討に加えて、より総合的な生活行動を想起させた上で継続時間を含め物理的・心理的に必要な単位空間を求めようとする手法と理解された。実験内容と結果について梗概だけでは理解できない部分があり伝え方の工夫が望まれる。インテリア設計では、ゆとりなどの心理的な評価を定量的に設計条件化する手法を探ることは困難だが重要であり、今後の発展を期待したい。

【災害・環境・感染】 033～037

座長：松崎 元（千葉工業大学）

033 2016年の熊本地震発災後における賃貸型応急住宅について、ヒアリング調査の結果から、建設型応急住宅と比較した肯定的評価と否定的評価を分析し、問題提起

を試みた研究である。「贅沢は言えない」との考えから、不便な状況を我慢し住み続けている可能性を示唆し、一般的に建設型よりも問題が少ないとされる賃貸型においても、住宅内部の設備等について問題が発生していることを指摘している。

034 コロナ禍における防災意識の変化に関する調査研究で、住宅インテリアの在り方について考察したものである。アンケートの結果、食料備蓄や生活運営に関わる備えは行われているが、在宅避難の需要が高まる一方で家具の倒壊対策が不十分である点を指摘している。造り付け収納の在り方や外観を損なわない対策の推進、適切な情報発信方法など、更なる展開が期待される。

035 2011年の東日本大震災から10年が経過した。本稿は「住まいの絵本館」蔵書より、戦争、天災、被曝、難民など、災害をテーマとする住まいの絵本59冊を分類し、出版年順に並べた表をもとに、それらの内容について記述したものである。絵本の分析から復興のあり方について考察した貴重な取り組みであり、「絵本が傷ついた人の心を癒し、人々の思いを後世に伝える役割を果たしている」とのまとめにある通り、今後もライフワークとしての展開を期待したい。

036 特別支援学校における感染症対策について、アンケート調査から環境整備の現状と課題を整理した研究で、普通教室および食堂、施設計画における感染防止対策の実施状況と評価についてまとめており、大変貴重なデータである。ヒアリング調査からは、仕切りが気になる生徒、マスク着用が困難な生徒、大規模校での教室不足、教員用更衣室の密集状態など、教職員の負担増加について具体的な状況が指摘されており、空間に対する現場対応への活用が期待される。

037 コロナ禍における暮らしに関する意識を整理するため、一般ユーザーに対するライフスタイル、インテリア・建築関係の学生・教員に対するコロナ禍での暮らしの状況、インテリア産業を支えるインテリアコーディネーター、インテリアデザイナー、建築士など、専門家におけるビジネスの状況について調査を行ったものである。WEBアンケートと書面によるアンケートで多くの回答を得ており、「建築・インテリア情報総合プラットフォーム」サービスに対する高い興味・関心が明らかとなった。次回の発表でさらに具体的な調査結果の展開を期待したい。

■令和5年度運営委員会だより

□総務委員会

委員長 松崎 元（千葉工業大学）

今年度の総会では、オンラインにて片山副会長に「インテリアの発達を近世フランスから考える」と題してご

講演をいただきました。また、片山副会長、白石前総務委員長に名誉会員の称号が授与されました。これまでの学会運営に対するご功績によるものですが、お二方には引き続き今後の学会発展に対するご指導をお願いいたします。

委員会はオンラインで1～2ヶ月に1回開催し、学会運営を円滑に進めるためのサポート役を担っております。支部・部会活動の活性化、大会運営、他団体との調整など多岐に渡りますが、学会活動は、あくまで会員の皆さまの研究や教育に基づく発表会や交流会などの活動が主役となりますので、是非関連する研究者や学生の皆さまに入会をお勧めいただき、オンラインも活用した活発な議論の展開をお願いいたします。

□国際委員会

委員長 ペリー史子（大阪産業大学）

特に報告ありません。

□論文審査委員会

委員長 渡辺秀俊（文化学園大学）

日本インテリア学会論文報告集33号については、昨年9月30日の締め切りまでに応募のあった18件の論文についての査読作業が最終段階に入っており、3月末に発行される予定です。応募いただいた会員の方々、査読にご協力いただいている多くの方々に御礼申し上げます。アジア地域のインテリア系の学会論文集AIDIA Journalについては、今年度も発行されませんでした。

委員会組織としては、新たに上野友輝委員（広島工業大学）に委員に加わっていただき、現在、論文審査委員会は、渡辺秀俊委員長、村井裕樹委副委員長、片山勢津子委員、橋本都子委員、高橋正樹委員の6名で運営しています。論文審査業務の公正性を維持するために、査読の手続きについて委員会で継続的に見直しをしており、本年度はいくつかの改善を図りました。

今後とも、会員の皆様と一緒に日本インテリア学会の発信力を高めたいと考えております。つきましては、引き続き会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

□広報委員会

委員長 棒田邦夫（金沢学院大学名誉教授）

広報は学会の啓蒙と会員への情報発信の委員会です。主に会報を発行して色々な情報を発信してきましたが、今年の6月からは広報委員会が管理者となって正式にホームページを運営することになりました。このホームページ、広報委員会が管理運営するにあたり外部に依存せず、内部で簡単に情報発信ができるシステムCMSで行うことになりました。このCMSを使うことにした理由は1) 支部の情報発信ページを確保して会員増強に活用し

てもらおう2) 外部からの色々な要請に対応できる仕組み3) 事業主体である各委員会、各研究部会と大会の情報操作が簡単にできて迅速な更新ができることです。まずは3月9日（木）に会長・副会長はじめ各委員長、各研究部会長、各支部長の方々を対象に操作説明会を開催しました。なお、4月に入りましたら第2回の操作説明会を行う予定にしております。この説明会には各委員会、各研究部会、各支部のホームページ操作担当者の方々に参加していただきたいと願っております。結びにお願いがあります、できる限り各委員会、各研究部会、各支部で更新をしていただきたいと願っておりますので、担当者の方々は広報委員会の一員にもなっていただきたいと存じます。

ご協力よろしくをお願いいたします。

□表彰委員会

委員長 高月純子（女子美術大学）

表彰委員会は昨年度、第29回卒業作品展のWEB展示、第34回学会大会の学生論文発表の表彰及び、卒業作品展の表彰を閉会式にてオンラインで発表させて頂きました。卒業作品展WEB展示は引き続き、インテリア学会HPにて受賞作品の閲覧が可能です。ご覧頂けましたら幸いです。出展して頂いた卒業生の皆様、教育機関ご担当の皆様には、厚く御礼申し上げます。2023年度、第30回卒業作品展につきましては、昨年同様、WEB展示を中心に10月の学会大会時に開催する予定です。作品展にご出展の検討をいただけるようであれば、作品選抜と保管等をして頂きたくお願い申し上げます。

詳細は、6月末頃にご連絡できる予定ですが、ご参考に作品展の準備の流れと、昨年の出展要項の概要を下記にお知らせします。何卒、お含みおきをお願い致します。

1) 作品展の準備の流れ

（本年度）

- ・1月：卒業作品の選抜と保管等のお願い

（新年度）

- ・5～6月：作品展の会場と出展要項の詳細決定
- ・6月末：担当者宛てに出展要項の詳細のご案内
- ・7月末：出品登録票の提出の締め切り
- ・8月末：提出作品データの画像提出の締め切り
- ・10月始：作品パネルの提出
- ・10月末・学会大会開催日：（パネル展示実施の場合）学会大会会場にて大会期間に展示。WEB上で期間を設定して開催。
- ・11月：学会HPにて審査結果等のお知らせ

2) 昨年の要項の概要

- *出品料はございません。
- *選抜の人数は1学校で1作品の推薦をお願いします。
- * [2023年3月卒業予定] の学生の卒業作品の推薦。
- * 作品（画像）の数は1～5点まで。
- * 1画像あたり20MB以下のWEB用データにて提出。

3) お願い

年度が改まり、作品展連絡のご担当者の変更・ご退職に伴う【引き継ぎ等】がある場合は、新しいご担当者のお名前とメールアドレスを早めにご連絡いただければ幸いです。

今後とも、表彰を通して、インテリアを学ぶ学生の支援と、インテリア学会の活動が広く知られる機会を高めたいと考えております。引き続き会員の皆様のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

□デジタル化推進委員会

委員 松崎 元 (千葉工業大学)

来年度に向けた準備段階で委員長を置かず、役割や体制についても検討中です。選挙後の新体制の下、限られた予算の中でどのように会員の皆さまへのサービスを向上し、時代に合わせた活動を活性化いただくか、ご意見をいただきながら、進めていく必要があります。

■令和5年度研究部会だより

□歴史研究部会

部会長 河田克博

特に報告ありません。

□人間工学研究部会

部会長 白石光昭 (千葉工業大学)

特に報告ありません。

□教育研究部会

部会長 金子裕行 (千葉県立市川工業高等学校)

今年度は計5回の教育研究部会をオンラインで開催しました。今年度のテーマは「卒業作品展の分析」とし、色々と検討を重ねました。卒業作品展は第1回が1994年にスタートし、今年度(2022年)で29回を数えます。以前教育部会では、この卒業作品展を『10年のあゆみ』(第1回1994～第10回2003)として小冊子に概要をまとめましたことがありました。この小冊子のデータと河村委員が所有している2015年までの作品の画像データ、及び高月委員が所有している2022年までの作品の画像データを共有し、分析する案がでてそれを実践することとなりました。また、分析方法の案として(1)作品のテーマやコンセプトのキーワードから分析(2)主となる表現について:実物製作・模型表現・CGパース表現・手描き表現 その他の分類(3)インテリアの解釈を拡大した作品の捉え方:内面の体験空間、素材への視点、文化継

承、風景継承など(4)建築、室内、家具、プロダクト、アート、まちづくり、ランドスケープ、都市計画など(5)作品の施設分類など:住宅、交通施設、商業施設、宿泊施設、教育施設、など(6)それまでにないコンセプトの言葉:アクティブラーニング、レジリエンスなど(7)学生または生徒を指導する教員の教育的視点などの意見ができました。今後は、分析担当を1)大学・短大担当2)専門学校担当3)高等学校担当、4)CAD担当に分け、来年度以降それぞれの担当がさらに分析方法を検討し共有しながら進めていくことになりました。

□期限付き研究部会

副会長 片山勢津子

令和4年度期限付き研究部会(2年間)として、下記の研究1件を採択いたしました。

名称:意匠法における建築物・内装に関する研究部会
代表者:小玉一徳

■令和5年度支部だより

□北海道支部

支部長 小澤 武 (小澤建築研究室)

特に報告ありません。

□東北支部

支部長 早野由美恵

東北支部におきましては、2021年度総会の際に日本の商業・展示空間のデザインを牽引している株式会社乃村



工藝社の現株式会社乃村メディアスのクリエイティブディレクター／統括部長である高橋文朋氏の講演会を開催いたしました。2022年度も本年度中に総会を開催し、会員の皆様へ向けて企画を考えております。評議委員、支部長も改選を迎え忙しい年度末となります。

そしてこの時期は、東北は雪も多く移動にも苦慮することが多いです。油断したところへの突然の大雪となることもあり、この冬の雪の降り方は例年よりも極端であるように思えます。またここ最近は対面での授業も多くなってまいりましたが、特に雪の多い地域ではオンラインのメリットも感じるものの多い、この季節です。

一年でも一番寒いこの季節に卒業制作展を開催する大学も多くあります。そのうちの一枚ですが、多くの方に足を運んでくださるようにと、以下の案内をいただきました。

以上、東北支部からのご連絡です。

□関東支部

支部長 内田和彦 ((株)オカムラ)

特に報告ありません。

□東海支部

支部長 中井孝幸 (愛知工業大学)

コロナ禍で支部主催のイベントの中止が続く中、2022年9月26日(月)に対面式とオンライン(Zoom)のハイブリットにて、第3回支部役員会を開催し、参加者は対面5名、オンライン5名の計10名となりました。昨年度から続けている「話題提供」は、名古屋造形大学・教授の溝口周子先生に「Hospitality Design おもてなしのデザイン」と題して、日建スペースデザインに勤務されていた当時にご担当された、ホテルや医療機関、名古屋モード学園のスパイラルタワーなど数多くの事例のデザインやコンセプトについて、お話し頂きました。その後、本部より次年度の第35回大会を東海支部で開催できないか打診があったことを報告し、前回(2016年度大会、名工大にて開催)東海支部で担当した際、特に会計業務が逼迫したため、大会運営の事務量を減らす必要があること、本部や他支部からのサポート、コロナ禍同様に作品展のWeb開催継続など、引き受け条件を示した上で、「対面開催をベースとしつつ、オンラインも活用した大会」として開催できるのであれば、引き受けを前向きに検討することにしました。また、本部からのホームページ刷新への支部活動費からの寄付のお願いについて報告し、支部正会員50名に対して1名当たり1,000円、計50,000円を交流活動等基金より支出することにしました。

2022年12月13日(火)に第4回支部役員会を対面式とオンライン(Zoom)で開き、参加者は対面7名、オンライン5名の計12名となりました。恒例となった「話題提

供」は、金田美世氏に「ステンドグラスはアート？建築？」と題して、三重県桑名市の諸戸邸におけるF・L・ライトや武田五一のデザインに基づく、ステンドグラスの復元について話して頂き、活発な意見交換が行われました。その後、本部より依頼のあった役員改選のための評議員選挙及び支部長選挙について協議し、選挙管理委員を幹事からは夏目先生(名工大)及び溝口先生、一般会員からは野澤先生(愛工大)に依頼することを決定しました。また、日本インテリア学会第35回大会(東海)の日程や見学会、実行委員会の組織について、意見交換を行いました。開催日程は、10月下旬で調整することになりました。

依然としてコロナ禍ではありますが、支部会員へのサービス向上はもちろん、地域社会との交流活動にも取り組んでいきたいと思っております。

□北陸支部だより

支部長 樺田邦夫 (金沢学院大学名誉教授)

ようやく巣ごもり状態から解放されて講演会や旅行などが行なわれるようになりちょっと晴れ晴れとした気持ちになります。北陸支部もこの気持ちにあやかって今年は新役員体制ともなり講演会、見学会ができればと願っております。なお、北陸支部ページに講演会、見学会を企画しましたら是非ご参加ください。お待ちしておりますので、よろしくお願い致します。

□関西支部

支部長 中村孝之 (生活空間研究室)

昨年9月24日に、大阪中之島美術館の協力により、企画展「みんなのまち大阪の肖像(2)」の学芸員による解説を行う「関西デザイン系大学・専門家向ギャラリートーク」を開催しました。大阪中之島美術館は、19世紀後半から現代までの美術とデザインを専門に、収集・保存・調査・研究・展示・公開・普及を行っており、商業や文化、美術やデザインといった分野を横断する、文化都市大阪の創造性を見直すことを特徴としています。

この展覧会では、戦後の大阪で開花した様々なアートや広告文化に加え、日本をリードした工業化住宅や家電製品をデザインの視点から捉え、生活に密着したデザインを実物や復元モデルで紹介しています。当日は、学会員とデザイン系の学生の41名が参加し、大盛況となりました。

今年度は、3月4日に昨年に続き第2回の「関西支部学生研究発表会」をオンラインで開催しました。3、4回生を中心に、修士や短大生の参加もあり、有意義な発表会となりました。

今後も、学会員に加え、将来の関西のインテリアを担う若い人たちにも学会活動に参加出来る企画を、関西の各種インテリア団体とも協力しながら計画したいと考えます。



□中国・四国支部

副支部長 平田欽也（広島工業大学）

1. 支部総会及び総会学術講演会

●総会

- 日 時：令和4年6月4日（土）14：00～15：00
- 場 所：オンライン Zoom
- 出席者：8＋委任状4名 計12名にて成立

●総会学術講演会

- 題 目：VRやARを用いたコ・クリエーションに関する研究とその実践
- 場 所：馬淵大宇 氏（岡山理科大学）
- 日 時：令和4年6月4日（土）15：00～16：30
- 場 所：オンライン Zoom

本年度も新型コロナウイルス感染症拡大防止の為、総会をオンライン（Zoom）で行いました。引き続きのコロナ禍ではありましたが、少しずつ対面での活動が再開され始め、昨年度の事業報告、会計報告、また本年度の活動計画を議論しました。中国・四国支部において毎年度行っている卒業設計・論文優秀賞（支部長賞）では、11大学・1専門学校において、卒業設計10作品・卒業論文5編に贈られました。表彰数は増加傾向にあります。また、現在、広島工業大学に中心を置く、中国四国支部の学生ネットワーク・マンセル（munsell）から、昨年度の活動報告と本年度の活動計画が確認されました。

2. 学生企画講演会

- 企 画：中国・四国支部 学生ネットワーク・マンセル
- 題 目：“まっとうな建築”
- 場 所：原 浩二 氏（建築家 原浩二建築設計事務所 主宰）
- 日 時：令和4年10月22日（土）13：30～15：00
- 場 所：広島工業大学 3号館 301製図室
オンライン（Zoom）と対面の併用

□九州支部

支部長 近藤正一（日本文理大学）

今回は、支部会員の活動をそれぞれご本人より2件、また2年目となりました学生向けコンペの後援について、ご報告いたします。

■熊本県立大学 高橋研究室「3Dレーザースキャナーを用いた茶室閑雲亭の実測調査報告」

熊本県立大学 高橋浩伸

近年頻発する未曾有の災害に備え、早急に日本の遺産とも言える文化財等のデジタルデータ化を進める必要がある。今日でも文化財等の測量図等は存在するが、それらはほとんどがアナログデータであり、しかも尺貫法表記である点など不都合な点が多い。これら日本の文化財等において「茶室建築」は、日本美を象徴する特徴的空間構成を持つ。限定された極小な内部空間は、日本人を静謐で心地よい時間へと誘う。500年以上に渡り継承されてきたこの日本美の極致とも言える空間を、次世代へ継承し、現代の新たな視点で考えるために、熊本県立大学高橋研究室では、現代に残る茶室の実測調査を行っている。2022年7月15日（金）研究室ゼミ生らと共に、長崎県平戸市内にある茶室「閑雲亭」の3Dレーザースキャナー実測調査へ出かけた。

松浦家は代々茶の湯を愛好し、37代松浦詮（あきら、号：心月、1840-1908）は1893年に「閑雲亭」を建設。ただし現存する茶室は1987年の台風で倒壊し、翌1988年に再建されたもので、2006年に登録有形文化財（建造物）に指定された。内部は、半間の枱床をもつ四畳の茶室と、六畳の座敷からなり、亭主の座る点前置の天井のみに下がり天井を張り、他は屋根裏表しである。南側に位置する六畳の座敷は、東西面全面の壁面を掃き出し障子とし、南面全面も腰障子を立て、開け放つと港の向こうに平戸城が望める開放感が特徴的である。茶室北面東側に板戸引き違いの矚り口が設けられ、その上には下地窓が切っており、室内には壁に折釘を打ち掛障子が掛けられているだけで、南や東面に比べ閉鎖的である。むしろこのような閉鎖性こそ茶室空間を特徴づけるものと言えようが、この閑雲亭の開放的空間構成は珍しい。

この「閑雲亭」は、これまでに調査した京都などの近畿圏で見られる利休を頂点とした、わびさびの空間とは趣が違い、本来日本建築に見られる開放的な空間構成であり、それに加え近代という時代の明るさや自由な発想が反映されたものと考えられる。

これらの2DCAD図面化、3DBIM化を進め、かけがえのない日本建築の歴史や文化を次世代へ継承していくのと同時に、茶室建築におけるインテリア空間を空間構成の視点から分析していきたい。



長崎県平戸市内にある茶室「閑雲亭」



実測調査の様子

提案するというプロセスを経ることで、地域課題解決の難しさや可能性を肌で感じられたのではないかと思います。



写真1 インタビュー調査の様子



写真2 地域の方々より講評をいただく

■大分県竹田市 空き家調査・利活用提案プロジェクト

日本文理大学 福田 健

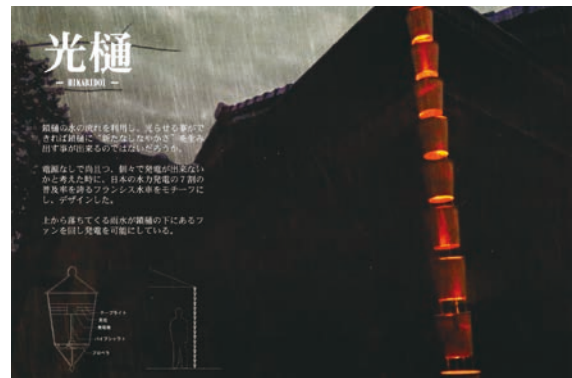
日本文理大学では、建築学科1年生を対象として地域課題の発見をテーマに大分県内各地でフィールドワークを行う授業（プロジェクト1）が開講されています。2022年度は、本学の竹田市居住支援協議会への参画がきっかけとなり、学生が空き家調査と利活用提案を行いました。

利活用提案には居住支援の観点も取り入れてほしいという狙いから、7月に事前研修として地域の方々から空き家の現状や居住支援の概要について説明を受け、10月には実際に空き家を利活用して営業している竹田市内のカフェやシェアハウスなどを見学し、提案のイメージを膨らませました。その1週間後に、市内4軒の空き家を対象に図面採取、家主へのインタビュー調査を実施しました（写真1）。これらのフィールドワークを踏まえて利活用提案を作成し、11月に地域の方々を大学に招いて成果発表会を行いました（写真2）。

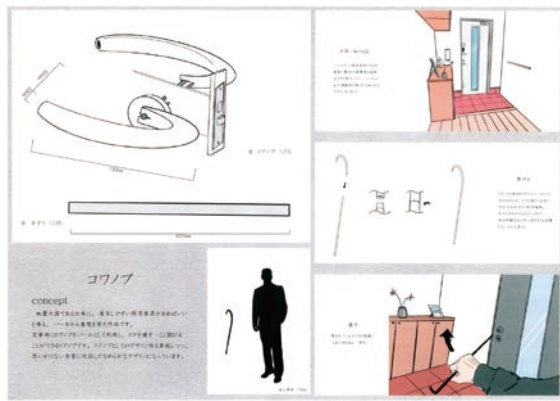
居住支援の観点から利活用を考える今回の課題は、1年生後期としては若干難しいものでしたが、空き家を保育園に転用して子育て世帯のニーズを満たすなど個性的な提案も見られ、柔軟な発想は地域への刺激となりました。また、前期で学んだ図学の知識を活かす、上級生にプレゼンテーション方法を聞くなど、意欲的に取り組む学生の姿が印象的でした。現場で見聞きした体験を基に

■家具デザインコンペ

昨年度に引き続き、大分県インテリア設計士協会主催による家具デザインコンペの後援に加わりました。応募者総数はこれまでの11年間で最大の127名となりました。今後も九州においてデザインを志す若者の裾野を広げる活動を継続的に応援していくことにより、延いては地域のインテリア文化の発展に貢献していきたいと考えています。



「光樋」最優秀賞・JIA賞
熊本工業高校 インテリア科 3年 伊藤颯太 君



「コワノブ」優秀賞
西日本工業大学 建築学科 3年 高松 迅 君



「HAKO BASE」優秀賞 熊本デザイン専門学校
建築・インテリアデザイン 2年 三浦康平 君

■事務局より

事務局長 棒田邦夫（金沢学院大学名誉教授）

会員の皆様におしげがございませう。勤務先の勤務地が変更となつた方、住所変更された方、連絡先・メールアドレスが変更となつた方など変更された場合必ずご連絡ください。確認が取れない場合、推薦者の方にお伺いすることになりますので、よろしくおしげいませう。

また、準会員の推薦者になつた方は対象学生が卒業し、準会員を続けない場合退学届けを出すようご指導をおしげいませう。一方、推薦者名・捺印のない入会申込書も多くなつておしげいませう。

入会申込書の正しい記述指導もよろしくおしげいませう。

■編集後記

広報委員長 棒田邦夫（金沢学院大学名誉教授）

本年度も年3回の会報発行できませうで、大変おしげいませう。コロナ禍で事業ができなかつたこともあつて、原稿が集まらなかつたことも要因の一つかと思つておしげいませう。コロナ禍も落ち着いてきた次年度の大会は対面で、との話もあり、コロナ禍を払拭できるかもしれませう。期待したいですな。

期待といえお、ホームページが次年度から新しく模様替えされるとのことです。より速報性が上がり、読みやすい、見やすいとなればこの会報の記事内容をどのようにすれば良いか、ということも語り合つていく必要があるように感じています。

現在の広報委員会委員は上野友輝（広島工業大学）、角田静香（ライオン事務器）、清水隆宏（岐阜工業高等専門学校）、仲谷剛史（積水化学）、棒田邦夫（リンクコネクト）の5名で行つておしげいませう。次年度からはホーム

ページの管理も含まれてきますので、スタッフが足りておしげいませう。会報業務は、掲載項目とその担当者への執筆依頼と校正の依頼を行うことです。ホームページ業務は、広報ページも含め、各ページの補佐をすることになりますが、どのようなかたちで関わるかルールを決める必要があると考へておしげいませう。

次年度もよろしくおしげいませう。

■日本インテリア学会会報第71号（2023.3.25発行）

編集者：棒田邦夫

発行者：直井英雄（日本インテリア学会会長）

広報委員会：棒田邦夫（委員長）、

上野友輝、角田静香、清水隆宏、

仲谷剛史

e-mail：k-bouda@kanazawa-gu.ac.jp（棒田邦夫）

■事務局

日本インテリア学会 事務局 伊藤千佳、棒田邦夫

〒920-0941 石川県金沢市旭町1-25-25

電話：080-2386-5652 FAX：076-224-8186

e-mail：jimukyoku@jasis-interior.jp